

平成30年度札幌市総合教育会議

- 1 日 時 平成31年1月24日（木）15時～
- 2 場 所 ニューオータニイン札幌2階 北斗の間（中央区北2条西1丁目）
- 3 出席者 札幌市長 秋元 克広
副市長 町田 隆敏
教育長 長谷川 雅英
教育委員 池田 官司（教育長職務代理者）
阿部 夕子
佐藤 淳
石井 知子
道尻 豊

- 4 事務局 教育委員会 教育次長 山根 直樹
生涯学習部長 鈴木 和弥
学校教育部長 檜田 英樹
児童生徒担当部長 長谷川 正人
総務課長 宮地 宏明
教育政策担当課長 高橋 俊範
教育課程担当課長 廣川 雅之
教育相談担当課長 田中 進一
庶務係長 札幌 義章
教育政策担当係長 吉田 亜希子
教育政策担当係長 小林 明弘
庶務係 田中 将太
教育政策担当係 大脇 章広

5 傍聴者 3名

6 議 題
札幌市教育振興基本計画改定版（案）を踏まえた今後の教育について

○鈴木生涯学習部長 ただいまから、平成30年度札幌市総合教育会議を開催いたします。

初めに本日の資料のご確認をお願いいたします。

お手元には、本日の次第と座席表、札幌市教育振興基本計画改定版（案）の概要版と本書、以上併せまして4点お配りしております。

それでは、本日の予定についてご説明いたします。本日は、札幌市教育振興基本計画改定版（案）を踏まえた今後の教育についてご協議いただく予定です。

目的や概要についてご説明をした後、皆さんにご協議をしていただきたいと思います。存じます。

それでは、以降の進行につきましては、秋元市長にお願いしたいと思います。

○秋元市長 本日は大変お忙しい中、ご出席いただきましてありがとうございます。どうぞよろしくをお願いいたします。

また、新年ということでございますので、今年一年また、どうぞよろしく申し上げます。

本日の議題は、今、事務局の方からも説明がありましたとおり、札幌市教育振興基本計画改訂版（案）を踏まえた今後の教育についてでございます。

お時間の都合もありますので、早速、事務局の方から説明をお願いします。

○鈴木生涯学習部長 私から、札幌市教育振興基本計画改訂版（案）についてご説明申し上げます。

お手元にお配りしております、資料1の概要版をご覧ください。

まず、「第1章 札幌市教育振興基本計画について」でございます。

本計画は、札幌市の教育の目標や方向性を明らかにするとともに、これらに基づき、教育施策を総合的・体系的に進めていくことを目指して、2014年に策定いたしました。

計画の構成は、計画期間を2023年度までの10年間とする、教育の基本理念を示す、「札幌市教育ビジョン」、それから、前期・後期の5年ずつの教育施策を示す「札幌市教育アクションプラン」となっており、このたび、後期5年間の教育アクションプランの策定に伴い、今年度中に改定することとしております。

改訂版策定に向けた、これまでの検討状況については、後ほどご説明させていただきますが、お配りした資料は、これまでの検討を経てまとめた「案」となっております。

続きまして、「第2章 教育を取り巻く現状」についてでございます。

教育を取り巻く社会経済情勢については、人口減少や少子高齢化などの状況のほか、現行計画策定以後の新たな要素として、子どもの貧困対策や働き方改革の要請、SDGs（エスディージーズ）の推進などにも触れております。また、昨年、北海道胆振東部地震が発生したことを受け、自然災害の状況についても触れております。

続いて、国における教育目標や教育政策の動向に関してでございますが、教育の目的・目標が掲げられている教育基本法は、2006年以降改正されておられません。

一方、個別の教育関連法では、こちらの表に、主な制定や改正の状況をまとめておりますが、様々な制度改正や各学習指導要領等の改訂などの動きがあったところです。

このほか、資料は右上に移りますが、本計画が参酌する国の教育振興基本計画の第3期計画が、第2期計画の理念を継承した形で、昨年の6月に策定されております。

次に、「第3章 札幌市教育ビジョン」でございます。

計画の基本理念を示す教育ビジョンは、先に述べました教育を取り巻く様々な状況を勘案しても、引き続き適切なものと考え、2023年度までの計画期間中は堅持することとし、札幌市の教育が目指す人間像「自立した札幌人」の実現に向け、3つの基本的方向性を引き続き設定しております。

次に、「第4章 札幌市教育アクションプラン（後期）」についてでございます。

後期の教育アクションプランの策定に当たりましては、まず、前期の振り返りを行いました。

前期におきましては、一定程度の成果や効果を得ることができたと認識している一方で、個別の事業・取組に着目しますと、「知・徳・体」の体力に関して、更なる工夫・改善の余地があるものや、右の表にあるように、成果指標の中でいくつか動向が思わしくないもの、また、子どもの運動習慣に関わる成果指標については、おおよそ目標値に達成している状況ではありますが、運動する子どもと、しない子どもの二極化が生じていることなど、課題も残る状況と捉えております。

そのため、後期においては、前期の施策展開を基本としつつ、教育の特性である「安定性・継続性の確保」ということも勘案しながら、改善等を加えて、更なる教育施策の充実・発展を目指すこととしております。

次に、資料の2枚目をご覧ください。

ここでは、教育を取り巻く現状や前期の振り返りを踏まえて設定した、後期の施策体系や施策展開、重要項目を示しております。

具体的な施策展開等につきましては、詳細な説明は割愛させていただきますが、法改正や学習指導要領の改訂の状況、前期における課題や成果などを踏まえ、新たな要素を加えるなどして、充実・発展を図っていくものとなっております。

また、資料の右下に記載しております「重要項目」につきましては、後期において特に力を入れていく項目を設定しております。

次に、資料の3枚目をご覧ください。

後期における成果指標についてでございます。

成果指標は、本計画の進行管理の参考とするもので、前期で設定した項目を継続して設定しております。

計画の最終年度であります2023年度の目標値につきましては、前期の動向や、全国的な動向、関連する施策や事業の特性などを勘案した上で、努力目標的要素も加味して設定しております。

最後に、資料の右下でございます「第5章 計画の推進に当たって」についてでございます。

計画の進行管理につきましては、毎年、事務の点検・評価を行い、その結果を報告書にまとめ、議会に提出するとともに、市民に公表するという手法で実施する予定でございます。

また、計画の推進に当たりましては、家庭や地域、ボランティアの方々、企業など、多様な主体との連携・協力をより一層図ってまいります。

計画案についてのご説明は以上でございますが、次に、これまでの検討状況について、ご説明させていただきます。

計画案をまとめるに当たりましては、昨年6月から8月までの期間において、学識経験者や学校関係者、公募委員等で構成する検討会議を開催し、多様なお立場からの貴重なご意見をいただきました。

その後、庁内における関係部局との調整、札幌市議会文教委員会への報告を経て、昨年12月20日から、今年の1月18日までの期間、パブリックコメント及び小中学生を

対象としたキッズコメントを実施し、市民の皆様から、幅広いご意見をお寄せいただきました。

現在、市民の皆様からいただいたご意見を参考としながら、最終調整を行っているところでございまして、当初の予定どおり、年度内に策定できる見込みでございます。

私からのご説明は以上でございます。

○秋元市長 ありがとうございます。

ただいま、計画案についての説明がございましたが、全体を通しまして、社会情勢の変化、あるいは、国の動向、そして前期プランにおける成果・課題ということをお話しさせていただいた内容かと思っております。

また、私が着任いたしました平成 27 年の 10 月にこの総合教育会議の中で協議を経て定めました教育の大綱、この中で「子どもたちの中にある『生きる力』を育み、大きく伸ばすことで、世界の舞台で活躍する『さっぽろっ子』を育てます」ということを教育の方針としてうたっておりますが、この方向性ということについても、方向性を一にしているのではないかと感じているところであります。

本日は、この計画案をまとめるに当たって、いろいろご意見を頂くこととなりますが、前期の振り返りの中で明らかになった課題について着目してテーマ 3 つについて、意見交換をさせていただければというふうに思っております。

1 つ目のテーマですが、この指標の中にもありますように、夢や目標を持っている子どもの数が減っているということがあります。そういう意味では、夢や目標を持つことの大切さということについて、意見交換ができればと思っております。

2 つ目は、説明の中にもありますが、運動する子どもとしない子の二極化と言われております。そういう意味での、健やかな身体の育成についてということについて、意見交換をしたいと思っております。

3 つ目について、不登校・いじめ等の不安や悩みを抱えている子どもが増えております。そういう意味では、不登校児童生徒等への支援ということについても、意見交換ができればと思っております。

いずれも、札幌市のみならず、全国的な課題ということであろうかと思っておりますし、一朝一夕で解決するといいますか、特効薬的なものも、なかなかない状況かと思っておりますが、この 3 つのテーマについて、意見交換ができればと思っております。

テーマ① 夢や目標をもつことの大切さ

1つ目のテーマは、夢や目標を持つことの大切さということであります。前期プランにおいては、当初値に比べても、現状値が目標値を遠ざかっている状況にあります。世の中全体が不透明と言いますか、大人にとっても、先の見通しが、なかなか立たないという状況の中で、子どもたちが将来の夢とか希望ということに対して、なかなか持ちづらい、生きづらいと、こんな状況もあるのかなと思いますが、少しでも子どもたちが生き生きと過ごしていけるためには、どのようにしていけばいいのかというような視点、あるいは、行政がどのように支えていく、地域の方も含めて、支えていけばいいのかということについて、ご意見を頂戴できればと思っております。まず1点目、将来の夢と目標という子どものことについて、ご意見を頂戴できればというところがございます。

○阿部委員 私自身も子どもたちに、将来の夢や目標を持っていただきたいなと思っております。将来の夢や目標を持つことが、進路にもつながっていく大きな連携になるなとすごく感じているところです。現在、私の仕事の内容で20代30代のいわゆる若年層と言われる方たちの就労支援をさせていただいているのですが、現在200人近い方のお話を一人一人カウンセリングさせていただいていますと、将来に向けてどういう仕事に付きたいかということが、自己理解が出来ていないから、就労にもつながっていないということを、非常に感じているところです。まずは、ご自身の得意なこととか好きなこと、その辺を掘り下げて聞いているのですが、それすらも、自己理解に及んでいないということをすごく感じていて、私もそうですし、私の周りもそうなのですが、やはり自分の好きなこと、得意なことを進路や就労につなげていくという人達もいる中で、まずは札幌市内の子どもたちに、自分の得意なことや自分の好きなことが何かということ、自己理解していただく機会を設けていくことがすごく大事なことだなと、しみじみ感じているところであります。

それで個人的な話なのですが、昨年度、キャリアコンサルタントの資格を得まして、札幌市内にもキャリアコンサルタントの資格を待っている方がたくさんいます。その方たちの得意分野というのは、一人一人の特性として、自分のやってみたいことをヒアリングしながら、夢や希望につなげていくという仕事を主としている人たちになります。是非、民間の力と言いますか、今、スクールカウンセラーの方が各小中学校に入っていると思うのですが、それと同様に、その方たちを活用しながら子どもたちの

夢や将来の目標に向けて今後どういうふうに進んでいったらいいかということ、まず、教員の皆様にもお話をさせていただくと同時に、一人一人のお子さんたちの支援がそういう形でできたら良いのかなと。そう感じておりましたので、この場で少し発言させていただければと思いました。以上です。

○秋元市長 ありがとうございます。

なかなか自分自身のことが、何が得意なのかとか、そういう自己肯定と言いますか、肯定感みたいなものが、少し子どもたちが持ちづらくなってきているのかなというふうには思っていますので、そういう意味では、自分を見つめ直すというものを、大きな話ではなくて、自分の好きなこと、得意なことから、あるいは自分の良さというものに気づくというのが重要かなと思います。

他に、ございませんでしょうか。

○石井委員 私も秋元市長が先ほどおっしゃったように、子どもたちには生き生きと前向きに、そして幸せに生きてほしいなと願っています。

私は未就学児の子どもがいるのですが、幼稚園や保育園などに行くと、幼少期の子どもたちというのは、自分の将来なりたいものとか、やりたいこと、興味・関心を自由に話してくれるのです。私が幼稚園に行くと「お婆さんの夢はなに？」と聞かれることがありまして、そうした幼少期の子どもたちと触れ合っていて、すごく感じるのが、子どもというのは、元々いろんなことに、好奇心とか興味を持っていて、夢もたくさん持っているものだと気づかされます。

幼少期の頃のまま、夢や目標を持って、私は大人に育って行ってほしいと思いますし、そのためにどうしていったらいいのかというのを、今回の会議に出席するに当たって考えたのですが、やはり、周りの大人、保護者が、子どもの興味・関心、疑問に思っていることを理解して、まずは認めてあげることが大切なのかなと思っています。やはり、親やまわりの人、大人がそれを認めてあげると子どもは自分の考えに自信が持てるようになりますし、目標も持てるようになるのではないかなと思います。それは、大人も同様だと思っています。逆に否定されると萎縮してしまいますし、自分の意見や考えや正直な気持ちを押し殺して、大人や周りの人の顔色を窺って、行動するようになってしまいますし、結果として、成長していく過程で、自分の夢や目標と見失ってしまうのではないかと考えております。

また、社会に不安を抱かせてしまうと、また、それも夢や目標を持ちづらくなるのかなと思っています。私が子どものときや学生時代のことを振り返って見たのですが、一度その時は、ニュースなどを見ていると、リストラや倒産、ニートという言葉がすごくニュースで出ていた時で、なので、安定志向がメジャーというか、良いもの。夢や目標に向かって挑戦することは、一種の賭けのような風潮がありまして、私と同年代の人たちも、そう思っていたと思います。

そういう、ネガティブな世の中だとか、そういった大人たちの背中を見て育った子どもたちというのは、やはり、同じく夢や目標を失ってしまうのではないかなと思います。そもそも、夢や目標を持つことがなぜ大切かと言うと、やはり、自分の力で幸せになるために、いろいろ解決方法を自分で考えて、判断して行動していく力だと思っています。夢や目標というのは正解がないですし、自分で手探りでつかんでいくものだと思いますので、私たち大人が子どもたちに出来ることを考えたときに、大人になるとなかなか出来ないのですが、私たち大人も夢や目標を持つこと、それを子どもたちに伝えることだと思いますし、社会で夢や目標を持って、活躍している人たちと、接触する機会を設けてあげることなのかなと思っています。

あとは、子どもたちが幼少期から自ら考えて、自分の夢や目標を達成するために、考えて行動させる機会というのを、教育の過程や保護者が機会を与えてあげることなのかなと思っています。夢が実現できるような安全・安心な社会であるとか、街であることや、大人になって夢や目標を実現する・叶える・働くということは楽しいことだよということを私は一保護者として、子どもたちに伝えていきたいと思いますし、そういう世の中だということを理解して育った子どもたちというのは、自然と夢や目標を持って、それを実現していこうという努力をするのではないかなと思っています。以上です。

○秋元市長 ありがとうございます。

その時代の社会、今、ニュースとか、いろんな報道される事柄の世相というか、そういうものは結構、反映されることが多いのかなと。今ちょっと、お話を聞いていて、そういう時代だったのかという部分においては、私などは、もう少し前の世代ですから、高度成長期みたいな話の中で、テレビが出て、三種の神器のようにだんだん生活が良くなる、そういう意味では物を買うこと自体も1つの夢だった。昭和30年代生まれは、テレビで初めて見た「プロ野球の選手になりたい」と思っていた。そういう意味では子

どもたちが育つ、社会世相の状況にも影響される部分もあるのかなと思いますので、先ほど阿部委員のお話もそうですが、自己肯定感というか、自分を認めていく。最近自己肯定感が持てない若者が増えていると聞いていますので、自分を改めて認めてあげるということも重要なことなのかなと思います。

他に、ございませんでしょうか。

○佐藤委員 ちょっと、別の観点から申し上げたいと思います。

確かにデータからは、夢や目標を持っている子どもの割合は、当初値から2～3%下がっているわけですが、見方を変えれば小学生で8割以上、中高生でも7割以上が既に、自分で確固たる夢や目標を持っているということになりますので、まず、これは実にすばらしいことなのだと感じております。

それから、一方で「特に持っていない」と答えている2、3割の子供に対して、確かに、我々大人から見れば大変心配になるのですが、今の時点で無理に大きな将来の夢ですとか、あるいは人生の目標というのを描かせなくてもいいような気がするのです。自分の夢や目標というものを絞り込み過ぎると、それが実現できなかつたときに折れてしまうということもある気がいたします。例えば、私がやっている大学生の就職指導でも、早くから業界研究を一生懸命やって、希望の職種や会社を事前に絞り込んでいる、いわゆる、意識の高い学生が実際に受けて希望の会社が全部落ちてしまったときにその後の就活を続けられなくなってしまうというケースを結構、よく見かけるのです。

その時、必要なのは何かということなのですが、一言でいうと「他の選択肢を持っていること」だと思うのです。目標を1つに決めて、邁進するというのも、もちろんいいことなのですが、それが実現できなかつたときに、すぐに別のルートを辿れる幅の広さというものを持っているというのが、大事なことだと思っております。少し抽象化して申しますと、「素早い変わり身を可能とする多様な価値観をもつ」ということなのではないか。いろんなことに興味・関心・好奇心をもって、手を出してみるということの方が、大きな夢や目標を1つ持たせるよりも、生きる力になりそうな気がしています。そこで、我々、何が出来るかということなのですが、今、申し上げたように、1つには、価値の多様性ということについて、伝えていくことだと思えます。

1つの価値というものにしがみつかずに、いろいろありで構わないのだということ伝えていく、柔軟性を持たせるということかと思えます。

そして、夢や目標が必ずしも、大きなものでなくてもいいのだと、身の周りの小さな夢とか、小さな目標でいいから、出来るだけたくさん、幅広く持つておくことが大事なのだということを教えることが重要なのだと思っております。

もう1つは、そうした多様な価値観を育むため、様々なことに、興味・関心や好奇心を持たせて、その知識の幅を広げてあげるとのことだと思っておりますが、それはにわか
に実現できることではありませんので、日々の授業等の中で先生方には是非、引き続きご
指導をいただければと思っております。

以上でございます。

○秋元市長 ありがとうございます。

いろいろな、体験・経験をすることによって、佐藤委員がおっしゃられたように、何か1つに絞っていくようなことは、現実的には小学校・中学校・高校になって、だんだん大人になっていくといろんなものが見えてくると。ただ、それぞれの小学生あるいは年少の子どもたちであれば、もっとザクツとしたことでもいいのでしょうし、年代に応じた夢や目標というものがあっていいのだらうと思えます。いろんな、多様な価値観ということを経験できるチャンスということを経験の中でも作っていくということも重要なことかと思っております。

今、教育委員からいろいろお話お伺いしましたが、教育長いかがですか。

○長谷川教育長 今もいろいろ幅を広げるというお話があったのですが、教育委員会としても子どもたちの将来の夢や目標といったもの、視野を広めていくことがすごく大事なことだと思っております。今、実際に事業として、企業と連携してやっていることは、進路探究学習とか、キタラのファーストコンサートとか、演劇鑑賞といった文化芸術体験。あと、大倉山の札幌オリンピックミュージアムでのオリ・パラ教育とか、青少年山の家、科学館などを利用した体験学習、いろいろやっています。

札幌ならではの、そういう施設を活用して、その分野の本物に触れていただくという体験の場を充実していきたいというところでございます。

本物に触れていただくということで、つい先日、札幌文化芸術劇場ヒタルのオープニングシリーズで、青少年向けのバレエ鑑賞授業をやっていただいているのですが、市内の2000人を超える中学2年生をご招待いただきまして、「白鳥の湖」と「ボレロ」の2本を見せていただきました。

特に私は、中学校の男子生徒というのはどうなのかなと、ちょっと不安でドキドキして見ていました。特に「ボレロ」というのが、30人ぐらいの男性のダンサーが上半身裸で、最初、ゆっくりスタートする曲なのですが、だんだん盛り上がって来ると、私が想定したとおり、最初、男の子たちは、くすくす笑っているのです。それが曲がだんだん盛り上がって行って、最後は本当にすごい終わり方をする、そのときに、その、くすくす笑っていた男の子たちが、本当に大きな声で「ブラボー！ブラボー！」と熱い声があちらこちらで聞こえて、やはり本物の力はすごいな、そして、この中の男の子で、ひょっとしたら、ダンサーを目指す子がいるのかな、なんて思っておりました。

先ほどから申し上げているように、本物を子どもたちの目に触れさせるということは、いかに大事な事かと感じておりました。

また、先ほど、佐藤委員から知識の幅ということで、お話をされておりましたが、札幌らしい特色ある学校教育の中で、読書ということを大事にしておりますので、読書ということを通して、知らなかった世界とか価値観、そういうものに触れて、創造力を高めたり、心を豊かにしていくということも、大事だと思っております。

石井委員も先ほど、家庭のお話をされておりましたが、今、家庭の中で、例えば、お父さん、お母さんの仕事のことを話すとか、子どもさんと将来のことをお話しするという時間がなかなか取れていないというアンケート結果が出ています。ですから、先ほど、石井委員もおっしゃっていたように、お父さん、お母さん、ご家族の方が子どもさんに、自分の仕事のことをお話しされるとか、将来の夢について、子どもさんと一緒に考えていくとか、そういうことも大切なのかなと思っております。いずれにいたしましても、札幌市教委といたしまして、子どもたちの心の中の夢とか目標、これらを育んでいけるように環境整備も含めて、しっかりと邁進をしていきたいなと思っております。

以上でございます。

○秋元市長 ありがとうございます。

それぞれ、子どもたちがいろいろな体験、いろいろなものを見ることで、自分でいろんなことを夢というか、「こういうものになりたいな」「こういうものが好きだな」という幅を持たせる機会を増やしていくようなこと、それと同時に、学年が上がっていけば、キャリア教育というものにもつながっていくのかもしれませんが、いろんな場面で、い

ろいろな気づきを与えるチャンス、機会を作っていくというのが、一番大きいことかなと思っています。

札幌もいろいろな施設がありますので、そうした施設を有効に使って、文化・芸術だけではなく、いろいろな機会を作っていくことは、これからも、取り組んでいく必要があると思っています。

そういう意味では、子どもたちに、いろいろな選択の幅を作って、また同時に、先ほど佐藤委員がおっしゃられたように、壁にぶつかったときに、方向転換と言いますか、そういう柔軟性を持っていけるような教育というものも重要なのではないかと思っています。いるところですので、引き続き、自ら学んで、考えられる、そういう子どもたちに向けての教育の充実をしていただきたいなと思っています。

テーマ② 健やかな身体の育成

それでは、2 つ目のテーマに移らせていただきたいと思いますが、「健やかな身体の育成」ということでもあります。子どもの運動習慣に関わる生活指標、1 週間の総運動時間 60 分未満の子どもの割合というものが、前期プランにおいては、おおよそ目標値に達成しているという状況がある一方で、全国的な課題として、運動する子どもと運動しない子ども 2 極化ということが、見受けられるようでございます。

人生 100 年時代と言われておりますので、健康寿命をいかに長く伸ばすかということは、生涯的な意味も含めて、重要なことだと思っています。この運動習慣、子どもだけではなくて、自分のことを振り返っても、なかなか定着しないなど。天につばするみたいなところは、なくはないわけですが、このことについて、ご意見を伺いたと思います。どなたからでも結構ですので、ご意見をお願いします。

○池田委員 体力というのは、活動の源でありますし、病気にならないように、自分の健康を守るということだけではなくて、意欲や気力を充実させて、より良い人生、WHO も健康の目標でうたっていますところの、ウェルビーイングな状態に至ると、そのためにも体力の向上というのも、とても大切なことだと思っています。

また、睡眠や食生活、食事などの生活習慣が乱れますと、気力や意欲の減退など精神面にも影響を及ぼしますし、そういうことについて、子どもさんや保護者の皆さんの理解を深めていくということがとても大切だと思っています。運動療法として、いろん

な精神の病気や体の病気になりにくくする予防効果を持っているということも報告されていますので、非常に大事だと思います。その上で、運動・食事・睡眠などの健康の3つの原則、3原則の習慣づくりについては、「まほうのかいわ」を合言葉にして、支えていくことが重要で、特に「の」ですか、「伸びたらほめる」ということが、とても役に立つと思います。

また、運動習慣を定着させていくということには、ずっと、札幌市では、なわとびをやっていると思っていますが、更にいろいろなアイデアを出すことが大事だと思います。例えば、いろいろな道具を使って授業の中で体を動かす方法などもアイデアとして出していただいて、いろいろなことを更に考えていくことが必要だと思います。

また、話は変わるのですが、オリンピック・パラリンピック教育を充実させていくのは、こういう運動習慣を定着させるということにも、とても重要だと思います。オリンピックの理念というのは、シンボルマークにも象徴されていますように、多様な人々の共生ということで、つまり、スポーツには、もちろん、体力向上ということだけではなくて、人をつなげる力があるということだと思います。

運動が得意なトップアスリートの方たちだけではなくて、障がいを持っていたり、子どもさんの中でも運動が不得意な方など、そういう方々をスポーツを通して共に繋がっていけるということで、それが運動の楽しさの本質なんだ、運動の持っている1つの本質的働きなんだということを打ち出して、オリンピック・パラリンピックに関する教育ということを浸透させていけば、さらに、運動習慣の定着ということにも、役立っていくのではないかと考えています。以上です。

○秋元市長 ありがとうございます。

「オリンピック・パラリンピック教育」と言っても、共生社会と言いますか、お互いの多様性を認識しあっていく、1つのつなぎ手段として、スポーツ運動があるのかなと思っておりますので、運動もそうでしょうが、いろいろ関心を持っていただくということが重要という感じがいたします。

他にご意見ございますでしょうか。

○佐藤委員 札幌市の子どもたちの運動力は確かにまだ、全国平均に届いていない項目が複数あるようですが、ここ数年の推移を見ますと、都市ごとに前年度を上回る形になっておりまして、徐々に上昇してきているということでもあります。

これは各学校におけるこれまでの取り組み、先ほど池田委員からもありましたが、体育館でのなわとび運動ですとか、スキー学習、雪かきチャレンジ、文化系スポーツ大会の実施、休み時間を利用した運動遊びなどの、各校の様々な工夫の成果の表れだと思っております。

ただ、一人一人の児童生徒に日常的な運動習慣を定着させるということは、なかなか難しいことだと思ひまして、先ほど、市長もおっしゃったように、私自身も実現できていないという状況です。自分の周りにはいる我々中高年の特に健康意識の高い方が、どうしているのかなと観察しますと、ウェアラブルウォッチ、スマートウォッチを腕に付けている方が多いような気がするのです。これは歩数とか距離とか心拍数を測定して、その数値を常に目に見える形にしておくことと目標が出来て、運動が続けやすくなるからではないかと思っております。

これを子どもたちに応用するとしたら、ウェアラブルウォッチを配るわけにもいきませんので、「体力向上ノート」のようなものを作って、毎年やっている体力テストで、自分の弱点を取り上げて、自分自身で数値目標を設定させると。そして、定期的にどれだけ上昇したかを自分で測定してノートに記入するということが考えられるなど思い、調べましたところ、既に実践している札幌市の学校が複数ありまして、実践研究としても公表されているということがわかったのです。そういうこともありますので、各学校におかれましては、他校の取り組み事例を是非、ご参考にさせていただいて、自校に適していると思ったものは、どんどん取り入れていって、これからも、様々な工夫を凝らしていって欲しいというふうに願っております。

そうした工夫の中でもう1つ留意点として加えていただきたいのは、運動を他の興味・関心と連動させるということなのではないかと思うのです。

私もそろそろ足腰の衰えを自覚しまして、階段のぼりを日常心がけているのですが、こういう単純トレーニングというのはなかなか長続きしないものだと思います。自分に楽しいことをやっていたら、自然に体が動いていたという状況を作り出すということが、大事なのではないかなと考えました。これも調べましたところ、実はこれに関しても、いくつか実践例が出ておりまして、好きな音楽に合わせてダンスをすることとか、あるいはそり遊びでも、その必要性があるので繰り返し山に登るとか、様々な取り組みが既に公表されているようです。是非、各校で工夫されている優れた取り組みを全市の学校で共

有する形でより効果的な方法を各校で探っていただければと思っております。以上でございます。

○秋元市長 ありがとうございます。

いろいろな効果が出ている実践例を他の学校に共有して、いいところをまねて、自分のところにあった工夫をしていただくというのは、重要なことではないかなと思います。

自分たちが子どものころと違って外で遊ぶということが、なかなか遊びながら体を動かすことが少ないですから、そういうチャンスを学校教育の中でも広く、好事例を取り上げていただければかなと思います。

他にご意見ありますか。

○石井委員 運動する子どもと運動しない子どもの2極化ということで、2極化については、恐らく子どもの育った環境とか周りの環境というものがすごく影響しているのではないかなと思いました。運動が得意だったり、スポーツが身近にある子というのは、やはり、小さい時から体を動かす遊びをしていたり、スポーツというものが身近にあったのではないかなと思います。でも、運動をしない子供がなぜ運動をしないのかというと、もちろん、そうした環境もなかったということもありますし、あとは好きではなかった、苦手意識があるのかなとも考えられます。

例えば、幼少期の時に運動能力の優劣をつけられて劣等感を感じさせられたことがあるとか、競争心をあおられて、その競争に負けてしまった経験があると、やはり運動やスポーツに対して、苦手意識や好きではなくなってしまうのかなと思います。

そうした、運動をしない子どもとか好きではないという子は、グラフで見たときは恐らく少数派だと思うのですが、そういう子どもたちの意見などにもしっかりと耳を傾けて、運動を好きになってもらうための工夫とか、楽しんでもらうための工夫というものを私たち保護者もそうですし、大人もどうやってアプローチしていくのかというのがとても大切だと考えておりました。先ほど、佐藤委員がおっしゃった他の興味・関心とつなげて運動やスポーツにつなげていく取り組みというのはすごく楽しみだなと私も個人的に思いました。やはり、運動が楽しいとか、運動すると頭や体がすっきりするというのを小さい時から、そういった経験を積みさせておくことも大切だし、やはりスポーツというのは人生を豊かにして、楽しくさせてくれるものですし、運動習慣の定着とい

うのは、健康でいられるということは広く知られていることなので、私たち大人も意識して取り組んでいかなければいけないなと感じております。

○秋元市長 ありがとうございます。

いろんな環境にもよるのかもしれませんが、楽しくと言いますか、そういう形で少しでも体を動かすというのは、みんな体に良いとはわかっているのですが、それをうまく引き出す環境をつくっていかねばならないと思います。

他にございませんか。

○道尻委員 運動嫌いになってしまう1つには、出来ないからやりたくないですとか、つまらないというふうになってしまうということもあるのではないかと感じます。

授業でも部活動でも、全ての児童生徒に難しいことまでも求めるのではなくて、その子にあったメニューでレベルは低いけれど、うまくできたという成功体験を積み重ねていくようにすることが大切ではないかと思っています。

入口のところで拒絶反応を生じさせてしまうのではなくて、「また、やってみたい」とか、「もっと、新しいことにもチャレンジしてみたい」という、意欲が生まれるような工夫を凝らしていかなければいけないのではないかと感じております。

そのように子どもの発達段階に応じて、楽しい運動をさせる工夫ということと、もう1つ大事なのは今回の施策にもあるような、同じ学年・年齢の子どもであっても、生徒一人一人にきめ細かく対応するということが求められるのではないかと思っています。今、教員の方の負担軽減とか、部活動のレベルアップの1つとして、外部人材の活用というのが、挙げられているところです。今回の施策の中にも書いてありますが、これも技術面とか成績重視に、そういうスポーツに関わっていた方によって、そういう方向性だけに進むのではなくて、教育という観点で一人一人の児童生徒に応じた指導を行っていただけのようにすること、この観点が大切ではないかなと思っています。

あともう1点、学校の授業とか部活動で行うこと以外に社会にはいろんな運動とか学びの機会があるということは、是非、学校教育の段階から子どもたちに触れておいてもらうことが望ましいのではないかと感じております。

私自身、数年前から、実はそれまで行ったことがない区民センターに出入りするようになりまして、区民センターに行きますと、いろんなサークル活動とか講座があるんだなということを、改めて感じたところです。例えば、文化系の活動でも家を出てその場

所まで移動するとか、今、野外活動がありますので、やはり体を動かすことにつながります。そうした観点から、今回の施策の中で注目していますのは、まちづくりセンターや児童会館などと、公共施設と小学校の複合化という点で、こういう方向性は運動習慣の継続もそうですし、生涯学習と言った意味でも大変有意義ではないかなと思っております。以上です。

○秋元市長 ありがとうございます。

先ほど、お話がありましたオリンピック・パラリンピック教育との絡みの中で、オリンピック・パラリンピアンの人たちがいろいろな形で積極的に普及活動を含めて協力をしていただけると。北海道は特にオリンピック・パラリンピアンの方が多いものですから、そういうアスリートの団体が出来ておりまして、その方々がまた学校に行って講義をしていただいたり、あるいは、一緒に体を動かすことをやっていただく、こんなことをさらに、広げていければなと思ってございますし、先ほどのテーマの中にもありましたが、他にいろいろな選択肢があるんだよということを子どもたちに知ってもらおうということも重要と思っているところです。

それでは、各教育委員のお話しがありませんが、副市長どうですか。

○町田副市長 私、この頃いろいろなところでご挨拶する機会があつて、その時に少子高齢化ということもあつてこれから大変なんだよという話を随分します。最初のテーマにも関わるのですが、「少子高齢化、子どもたちはこれから負担をたくさん負わせられるんだ」と言うと、あまり夢を持てなくなってしまうと思いますが、高齢化ということは決して悪いわけではなくて、平均寿命というのはどんどん伸びる。その中で平均寿命100年時代を迎えるに当たって、行政として大きく関わらなければならないことは、先ほど市長も言っておられましたが、健康で長寿で幸せな社会をどういうふうにするかということだと思えます。

長寿で健康寿命を延ばしていくためには、どうしていったらいいのか、1つは、食の問題、食事の問題、運動習慣の問題、それから社会との関わりを将来に渡っていかに持っていくのかということが必要であります。

運動習慣を持つということは、学生の頃から児童生徒の頃から、そして働いているときも持ち続けるということ。定年退職になってから急にスポーツを始めるということになると、アキレス腱を切ることはよくあることなので、そのスポーツとの関わりを持つ

にはどうするかということで、スポーツをする、スポーツを見る、スポーツを支えるという形で関わりを持つということが必要だということ。

そして、スポーツをすることについては、いろんなスポーツがある、そしてそれを支えるということは、いろんな支え方があるということ。

そして、障がいがある方がスポーツをすることについては、いろいろな支えが必要で、オリンピック・パラリンピックというのは非常にそれを分かりやすく、いろんな形で見せていくためのものとしてあるのかなと私は思っております。札幌市は2030年のオリンピック・パラリンピックの招致を目指しているわけですが、オリンピック・パラリンピックをやることが究極の目標ではなくて、そのスポーツ文化を定着させる、そのための1つの手段としてオリンピック・パラリンピックがあるのかなと私は思っております。

その中でオリンピック・パラリンピック教育の推進、スポーツ文化をいかに根付かせていくかということ、子どもたちに対していかに教育していくかということが、私は非常に重要ではないかなと思います。以上でございます。

○秋元市長 ありがとうございます。

先日、札幌ドームで大運動会というものをやりました。

企業の皆さんや親子・家族でいろいろ参加をしてもらって、札幌ドームを10人のリレーでだいたい1周2kmぐらいのコースを20km走るということで、階段上がりもありまして、終わった後にみなさん、大人も子どもも楽しいと言っていて、そういう意味でも楽しさがなければ長続きしないだろうなという気がするのです。最初、どれだけの人が集まってくれるのかなと思っていましたが、随分、皆さん集まって、楽しかったと言っていただきましたので、そういう機会を作っていくというようなことと、札幌、北海道にはプロスポーツのチームがサッカー・野球・バスケットボールいろいろありますので、プロチームの人たちで食育とか運動ということについてのノウハウと言いますか、まさにプロ選手が体力維持していくトレーニング方法とか科学的なものもあり、いろんなことを協力してくれるというお話をいただいております。そういう意味では、せっかくあるプロスポーツチームと、多分、子どもたちにとっても有名な選手が来て一緒にやってくれるということは興味を持ってくれると思いますので、プロスポーツあるいは今の時期ですとスキー・ジャンプ、そういう選手アスリートの人たちの、先ほどオリンピック・パラリンピアンのお話ししましたが、そういう選手の皆さんにも協力いた

だいて、子どもたちに関心を持ってもらいながら、食べることあるいは運動することを楽しみながら、自分もやってみようと思いつける。こんなことを少し取り組めるのではないかなと思っておりますし、そういう協定ということも進んできていますので、是非、学校教育の中でも取り入れてもらえればなと思います。そういう意味では、いろんな分析的なものとか、体力増進のためのノウハウというの、結構、プロチームみなさん持っていますので、そんなノウハウというものも子どもたちの年代に合わせたものというのを、少し開発していければなと思っておりますので、運動の定着に向けて様々な物あるいは選択肢を増やしていくという取り組みをしていければなと思っておりますので、このことについても、教育委員会としてもいろいろ考えていただければと考えております。

テーマ③ 不登校児童生徒などへの支援

それでは、3つ目のテーマですが、「不登校児童生徒などへの支援」ということについて、意見交換をしたいと思っております。成果指標の中で「いじめなどの不安や悩みを身近な人などに相談する子どもの割合」は増えていますが、まずは子どもが相談しやすい環境をつくるということ、併せて周囲の人が子どもたちのサイン、子どもたちが困っているということに早期に気づいていくというのが、重要なのではないかなと。いろんなSOSが出ているけれど、それがうまくキャッチ出来ずに、いろんな残念な結果になっているという事例が過去にありますので、そういうことを含めて、子どもたち一人一人に向き合っていく、子どもが安心して学べる環境づくりというものが必要なのではないかなと思っております。具体的にどのような支援・サポートをしていけばいいのかということについて意見交換が出来ればと思っておりますので、よろしく願いいたします。

どなたからでも、結構でございますので、ご意見いただきたいなと思っております。

○池田委員 不登校の児童生徒さんたちは、恐らくそれぞれの発達段階によって、いろんな心的負担を抱えていると思っておりますので、そういう方々を少しでも軽減していくことが大事であろうと思っております。またその子どもさん自身とか、保護者の方とか、あるいは子どもの担任の先生だけが不安や悩みを抱え込むことにならないように、身近な方に始まって、相談窓口ですとか、いろいろな専門的な機関と連携を広げていくということが、恐らく必要であろうと思っております。

例えば「札幌子どもの心の心療ネットワーク事業」の中の「札幌子どもの心のコンシェルジュ」なども、十分活用されていると思いますが、更に周知していったら、利用が増えていくといいと思いますし、また今後、様々な不登校のお子さんたちの親の会などもありますので、そういうところとの連携も考えていけたらいいのかなと思います。

不登校という言葉を知ったり、不登校について、考えさせられるときに、いつも多様性という言葉が頭に浮かびます。子どもさんも本当に様々な個性を持った方々がいると思います。もしかすると、今の学校という場には、なかなか馴染めないかもしれないけれど、すごく個性的で豊かな才能やセンスに満ち溢れていて、いわゆるイノベーションを担っていけるような人材もいると思います。そのような子どもさんを含めて、のびのびと自分を生かしていけるような多様性というものが、なるべく今以上に担保されるような場所に、学校がなっていけばいいのかなという気がします。そういう意味からも、今回のアクションプランの基本的方向性の3「市民ぐるみで支え合う仕組みづくり」ということが大事と思ひまして、地域のいろんな人に地域に更に学校が開かれていくような仕組みやシステムが出来ればいいのかなと思っております。以上です。

○秋元市長 ありがとうございます。

保護者の方、あるいは先生もそうかもしれませんが、一人で抱え込まないでいろいろな方々と相談をするということが支え合うこと。いろいろな方と相談できる環境がありますので、それがうまくつながっていくというのが重要なのかなと思っております。

学校の1つの組織の中だけではなくて、地域の方を含めて、これまで以上にいろいろな人とのネットワークで解決をしていく、あるいはこれ以上深刻にならないようにしていくというのは重要なのだらうと思います。是非、そういう取り組みについても広げていただければなと思っております。

他にご意見ございませんでしょうか。

○阿部委員 私、仕事柄、たくさんのお母さんとお話をさせていただく機会をいただいているのですが、数年前から子どものいじめに関するご相談事が非常に多くて、どうしたらいいのだらうね、ということが多かったのですが、ここ1年ぐらいで、学校に通っているお母さん達の中でスクールカウンセラーを利用して、早期解決につながったという声を聴く機会が非常に増えてきております。

実際に相談されたお母さんのお話を聞きますと、親子で相談されたということで、自分ではどうしていいか分からなかったけれど、専門性の高い方に親身に相談に乗ってもらったことにより、すごく親子で救われたというお話を聞いたときに、私も教育委員の1人として安心してお話を聞かせていただきました。やはり子どもにとっても、保護者の皆様にとっても、学校にそういう相談先があるということが非常に今、広まってきているなというのは、私自身も認識しております、今回の振興基本計画の中にもスクールカウンセラーの配置時間を拡充していただいたり、ソーシャルワーカーの方を増員していただいたり、相談支援パートナーの方を活用するという計画が多岐に渡っております。そういう意味では、先ほどから話題に上っているように、子どもたちには、自分の親に相談することもできますし、教員の学校の先生にも相談したり、保健室の先生に相談するという機会もあると思うのですが、スクールカウンセラーの存在をもっともっと拡充して広めていただくことによって、相談先がたくさんあるのだということを広めていただくと非常にありがたいなと思っているところです。

もう一方では、子どもたちの低年齢化になっているネット社会と呼ばれているSNSの活用ということで、私も一人の親として、このままではいけないなというのを切実に感じています。SNSの世界に大人がなかなか入り込めないということで、ネットパトロールもいろいろとやっていただいていると思うのですが、その中で行われる会話がなかなか大人の目が入り込めないもどかしさを感じています。昨年度、ある中学校で道徳の授業を拝見させていただきましたときに、一人の女の子が「SNSで自分の発信した内容が、すごく拡散されてしまって、どうしたらいいのだろう」ということを道徳のテーマとしてやっていただいたときに、こういった一つ一つのSNSの活用の仕方が子どもたちにとっての一つの情報提供になっていき、それがとんでもないことになっていくということもあるでしょうし、正しい利用の仕方というのが、授業を通して子どもたちに伝えていただくということも必要だなということを感じました。また、私たち保護者にとっても、SNSの活用の仕方が、どう、我が子に伝えていったらいいのかというのは、私も娘が中学校の時に、初めてスマートフォンを渡したのですが、最初が肝心だなと利用の仕方を口酸っぱく伝えていくということと家庭でのルールを作っていくということ。そして、家庭内では限界がやはりどうしてもありますので、PTAなどでそういうことを話題にして、どうやって大人の目でSNSの活用をうまくつなげてい

くかということが、これからの課題であり、大人の私たちが頑張っていかななくてはいけない部分の一つかなと感じているところです。

○秋元市長 ありがとうございます。

最初のスクールカウンセラーとかスクールソーシャルワーカー、これはそういう場がたくさんあるということ、チャンスが広がるということは大事なことなので、これはどんどん拡充をしていかなければいけないかと思っております。

2点目のSNS。これは今の子どもたちの中で、最初に、いつの段階から渡すのか、どのように使わせるかとか、情報リテラシーということをきちんとしていないと、なかなかブラックボックスになってしまっている。目に見える形ではないですから、その教育というものがこれから課題と言いますか、結構、SNSの中で誹謗中傷とか、いじめのような原因になる事柄というようなことがありますので、どのように中を注意深く見ていくかということで、まだ課題も多いのかなと思っております。

その他ございませんか。

○道尻委員 不登校の児童生徒さんの問題ですが、平成28年度の調査では小中学校における不登校の児童生徒の割合というのが平成10年度以降で最も多くなっているというデータがありまして、しかも、長期の不登校による生徒さんが多くなっているということで、非常に大きな問題と捉えるべきだと思います。

不登校の要因ですが、統計的な結果としては、「不安と無気力」というのは約6割ということで、その不安の内容というのは、「家庭に係る状況といじめを除く友人関係をめぐる問題」ということが多いと出ております。これだけから推測するというのも、やや乱暴な話ではありますが、社会とか人間関係が複雑化、多様化しているのかなと、それに応じてお子さんの不登校というのも1つのパターンによるものだけではなくて、いろいろな原因による多様なものが入り混じっているのではないかと感じるところです。

そういうところでどういう対応をしていけばいいのかということですが、先ほどからもお話に出ているとおり、児童生徒とか保護者に対する相談支援の体制というのが、まず、一番大事なところではないかと思えます。

それも、問題が複雑なだけに専門的な見地からの適切なアドバイスということをいかに早い段階で実現するか、そこにつながるようにどのように働きかけていくかということが、基本的に求められるのではないかなと思えます。

私の仕事などにも、もっと早い段階で専門家に相談してくれれば、我々からすれば、あまり難しい問題ではなかったのに、それが適切な時期に対処できなかったために、問題を複雑化させてしまって、解決が難しくなるということも少なくないところがあります。教育の問題は全く違う面があるかもしれませんが、やはり適切なアドバイスが早い段階できちんとなされるということは、きっと、望ましいことなのだろうと感じています。

反面、そういうことが一人一人の児童生徒さん、保護者の方に対して実現をしていくということは、それを担う方にとっては、大変重い困難な問題ではあると思います。ただ、それをやっていかないと今の状況は改善していかないのかなと感じているところです。

もう一方で、不登校の児童生徒さんが学校に行けるようになることは非常に望ましいわけですが、それまでの間、教育支援センター等あるいは自宅で安心して、その状況に応じた教育というものが受けられるということも、大事なことかなと思います。

今回の施策の中にもいろいろ安心して学ぶための支援というのが盛り込まれておりますが、それを一層、皆さんに知ってもらい、かつ内容を充実させていって、しかも、先ほどのように不登校の要因が様々である児童生徒さんの個別対応が求められるということであれば、それに応じて支援の方も柔軟に運用していかなければいけないのではないかと、そういう視点が是非必要なのではないかと思います。以上です。

○秋元市長 ありがとうございます。

いろいろな相談の状況というのも複雑化しているので、専門性を持った人間が柔軟かつ丁寧に個別の状況に対応していくということが必要だということは、それなりの体制を作っていかなければならないのだろうと思いますが、そのあたり、教育長、どうでしょうか。

○長谷川教育長 今、道尻委員からお話があったように、不登校の要因というのは非常に複雑化していて、早期の解決というのは難しいと市長からもお話がございました。先ほどから、お話があったようにスクールソーシャルワーカーとかスクールカウンセラー、相談支援パートナーと、いろいろ教育委員会としても、その体制の強化に向けてやっているわけなのですが、まだ、それがきちんと伝わっていないところで問題の解決が遅くなっているところもあると思いますので、今後も、そういう体制の強化も含めて、きち

んと相談する窓口がたくさんあるということを学校を通じてお伝えをしていかなければならないのかなと思っております。

先日、指定都市教育委員会の教育長・教育委員が集まった会議が東京であったのですが、そこでいろいろな話題が出まして、不登校の関係についても少し出ました。

そこで興味深かったのは、堺市なのですが、堺市が大阪府の中でかなり不登校の児童生徒が多かったということで、堺市としても非常に問題視していたということでした。

その解消のためだけではないのですが、まず、実施したのが小中一貫教育の推進リーダーを全校に配置をしたと。当然、小中一貫でするので中1ギャップ解消というのは、目的の1つにあるわけですが、やはり中1のギャップをきっかけに不登校になってしまう生徒さんもいらっしゃるということでした。その解消がまず第1段階で、その次に生徒指導加配。教員を全校に配置して、これを全部単費でやっています。全校に配置して、不登校を含めて困りを抱えた子どもたちの支援サポートを行っていったということで、ここ数年で札幌市もそうなのですが、不登校生徒数は右肩上がりでございますが、堺市は何とか増加傾向に歯止めがかかったということも言っていました。そのあたりのところをもう少し分析をして、札幌市では、どういうことが取り組めるのかなというところも考えていきたいなと思いますし、小中一貫教育については、今、札幌市としても準備をしているところでございますので、そういうところで不登校の解消の効果が期待できると思っております。また、友人関係が不登校のきっかけになると考えられますので、いじめられる子だけではなく、いじめる子に対しても寄り添ったケアや指導も、もっとしっかりやっていきたいと思っております。いずれにいたしましても、子どもたちが笑顔で安心して学べる環境づくり、これは我々がやっていかないといけないと思っておりますので、今後も、しっかりとやっていきたいと考えております。以上でございます。

○秋元市長 ありがとうございます。

○町田副市長 不登校の原因というのは、今、教育長がおっしゃっていましたが、いろんな要因が複雑に絡み合っているということで、その背景にあるものとして、貧困とか障がいという問題もあると思いますが、基本的に人間というのは拘束されると、そこから逃れたいと。また、逆に言うと、あまり自由になると、また群れを求めるみたいな非常に矛盾した動きを本性として持っているものですから、不登校の問題というのは、子どもたちの個性にいかに対応するか、子どもたちにいかに寄り添うかということ。寄り添

うということは、言葉では簡単ですが、本当にいろいろ大変だと思います。今、いろいろおっしゃっていましたが、教育委員会でもいろいろな制度があると。制度として何が効果的なのかというものを、例えば加配をする場合にもスクールカウンセラーという形でやっていますが、生徒指導加配をどうするのが一番効率的なのかということと、工夫をしながらやっていかなければならないということだと思います。

基本的に制度を作っているいろいろやったにしても、やはり個々の先生に頼るところが多いし、例えば、その制度だけでは対応できないもの、学校や教育委員会だけでは対応できないものをフリースクールがいろいろな形で対応してくれているということも含めて、いろいろ全体を見ていかななくてはならないのかなと思います。

それと、不登校の期間が長くなればなるほど、そういうところからの回復が難しいという問題もありますし、不登校になった期間というのは、子どもたちは学校で学んでいないわけで、これから戻っていく高校・大学、社会に出ていくときにいろいろハンディを負っているわけですから、そここのところのハンディキャップを埋めるためにはどうしたらいいのかという、学び直しの仕組みみたいなものをどう考えていくのかという視点も必要ではないかなと思います。以上です。

○秋元市長 ありがとうございます。

先ほどから、いろいろ、お話がありましたように、1つはいろいろな相談体制を作っていくとしても、専門性のある方々に早期に相談できる体制。体制を作っても、そこうまく繋がらないといけないわけですから、まず、知っていただいて、いろいろなところに相談が出来る体制があるということを、保護者の方を含めて、多くの方に知ってもらって、ちょっと気になることがあれば、気軽に相談していただいて、早期に解決するものであれば、早期に解決していく。これはそういう意味では、教員だけでは解決していきませんので、「チーム学校」のような形で、いろいろな専門性の体制を作りながら、強化しながら、チームあるいは地域の方との連携も含めて、子どもたちをいかに育んでいくのかということ、全体の中で考えていく仕組みを、もっともっと考えていく必要があるのかなと思っております。そういう意味では、教育委員会だけではなくて、もちろん、子ども未来局とか、市役所のいろいろな部局、例えば、子どもの貧困問題については、子ども未来局の中で、児童会館でちょっと気になる子どもがいたり、気づきと言いますか、サポート・支援が必要なのではないかと児童会館側の職員が気がつくときが

あって、気がついていても今までは手が出せないと言いますか、児童会館側で勝手に入って行くわけにはいかないのです、そこで今、各児童会館に回りながら、地域あるいはいろいろな福祉の現場にチェーンをつなげていくような相談員と言いますか、今、やり始めているのです。いろいろなところで、まず、早くいろんな方につなげていく、もちろん、地域の方々にも状況を見てもらうというところで、少し外側にネットワークあるいはコーディネートする方たちを置くことによって、いろいろな解決をしていくということが出てきております。是非、教育委員会の方としても学校だけではなくて、いろいろな部局、あるいは地域の方、いろんな相談される方々と、まさにネットワークを作って対応していく、本当に出来るだけ早期に深刻な状況にならないうちに対応していくことを是非、取り組んでほしいなと思います。

それでは時間もかなり押してきましたが、今日、3つのテーマに絞ってお話をいただきました。冒頭、教育振興基本計画（案）の中には、これらのテーマ、課題解決に向けた取り組みということも盛り込まれているところではありますが、今日のいろいろなご意見を付け加えて参考にしてもらいながら、具体的な教育に係る施策に取り組んでいきたいと、思っております。

「子どもたちが健やかに育つ札幌」の実現に向けて、引き続き、ご尽力をいただきたいと思っているところでございます。

あと、何か全体を通して、ございましたら。

よろしいですか、それでは、今日の議題は以上でございます。本当にありがとうございました。

○鈴木生涯学習部長 これをもちまして、平成30年度の総合教育会議を終了したいと思います。本日は、どうもありがとうございました。

以 上